（事後Ｃ）

評価委員会総合評価

研究課題名：c7　海洋モデルの高度化に関する研究
評価委員
　委員長：隈健一
　委　員：高薮出、大野木和敏、安田珠幾、小泉耕、堤之智、青梨和正、
　　佐々木秀孝、鈴木修、橋本徹夫、山本哲也、石井雅男、丸本大介
評価年月日：平成 30 年 11 月５日

１．総合評価

■　非常に優れた研究であった。
□　優れた研究であった。
□　研究を実施した意義はあった。
□　失敗であった。

２．総合所見

本研究は、気候の変動を考える上でも重要な存在である海洋について、海洋モデルの再現性能の向上を図り、海洋変動の実態や特徴を明らかにし、その要因を解明することを目指した研究である。

本研究により、全球規模の海洋循環、海氷から沿岸、内海の海況までの気象庁の海洋モデル全般を担う開発が計画的に進められ、着実な成果が上がったことは高く評価できる。特に、高解像度海洋モデルの開発は、今後の気象庁の沿岸防災業務への貢献に期待が持てる。

また、研究成果の査読論文としてのドキュメント化、MRI.COM Ver.4 の開発や利用環境の整備を通じた開発モデルの部外への提供等、社会的なアウトプットを意識して取り組んだ点も評価できる。

以上のことから、本研究は、適切な目標設定と研究体制のもとに実施され、当初想定した成果が得られた非常に優れた研究であったと評価する。

なお、今後の次期課題の実施にあたり、以下の指摘事項を踏まえて、取り組んで欲しい。

・他の研究課題の見本となる内容であり、今後の取組に期待したい。海洋モデルの開発は確実に進められているので、今後は、より大きな目標設定をお願いしたい。
・今後、気象庁全体の海洋関係の人材育成や業務移転等に積極的に関わり、当該研究を効率化するとともに気候変動研究への主体的な寄与にも期待したい。
・部外連携に向けた海洋モデルの大学等研究機関への公開の取組について、今後の発展を期待したい。
・研究課題に「開発管理」を加えたことに、特に意義があった。
・開発した海洋モデルは汎用的なモデルなので、日本の標準的なモデルになるように努力をお願いしたい。